

選 評 「書きたい思いと〈戦略〉と」

藤田 のぼる

この文学コンクールの選考に参加して三年目、今年の候補作品は今までと比べても力作が並んでいる印象でした。そして、その一つひとつがとても個性的でした。

「いい文学作品とはなにか」という問いに答えることはほとんど不可能ですが、こうしたコンクールでどういう基準で選ぶのかという問いならば、ある程度答えることはできます。大きく言って二つの要素があり、一つは作品の完成度ということ。その中味はストーリーのおもしろさとか表現のうまさ、あるいはそのストーリーにふさわしい長さといったことでもあります。もう一つの要素は、オリジナリティーというか、他の作品にはない独自の魅力を備えていること。いかにまとまった作品でも、どこかで読んだような、あるいはいかにも思いつきそうな作品では評価は低くなります。このオリジナリティーという中には、作者にとってのその作品を書くことの意味といった点が、含まれるように思います。

さて、優秀賞の「ねばねば」ですが、一つめの完成度という点からみて、ほとんど文句のつけようがありませんでした。意表をつく書き出し、「ねばねば」というナンセンスなキャラクターと「自分探しの旅」「ホームステイ」といった〈まじめ〉なアイテムの組み合わせ。こういう作品は、書き出したのはいいが、途中で始末に終えなくなるというのがよくあるパターンですが、そこもあっさりクリアしています。ただ、ちょっと展開があっさりしすぎで、おしまいもやや収まりすぎという感じで、読者が「おもしろい話を読んだ」という気分にはなっても、なにか得体の知れないものに出会ってしまったという、そういう読後感までには至らないように思いました。要求水準が高すぎるかもしれませんが、これだけのセンスのある作者ですから、そのあたりもう一步踏み出してほしかったと思います。その点が、上記二点目の「オリジナリティー」の問題ということになるのでしょうか。

奨励賞のふたつの作品も力作でした。「雪空の下、小さな世界」は、誕生日が同じ四人の子どもたちという設定自体はやや無理があるはずなのに、マンションの三つの入口といった舞台設定にとってもリアリティーがあって、作品世界を支えています。ストーリー自体は良くも悪くもテレビドラマ風なのですが、子ども時代の思い出がとげのように心につきささって、ずうっと自分をおもい支配してしまっているという感覚は、多くの読者にとってなにかしらの痛みを共有させるものがあるのではないのでしょうか。そうした基本的な枠組みができていれば、ストーリー展開に多少の強引きがあっても、読者はついていくことができるという好例のように思いました。

作品を書くためには、書きたいという強い思いと、それを読者に納得させるある種の戦略が必要ということになると思います。そして、それを手に入れるためには、やはり多くの作品と出会い、そこから学ぶということが絶対に必要だと思います。さらなるチャレンジを待っています。